

ダニエル・バースタイン  
訳 鈴木主税

# ユーロ クエイク

E U R O Q U A K E

Daniel Burstein

「ヨーロッパ合州国」の誕生から新しい世界秩序へ

ヨーロッパ 日本 アメリカ

三田出版会

300  
F81  
103

# ユーロクエイク

E U R O Q U A K E

ダニエル・バー스타イン

訳 鈴木主税

ユーロクエイク

——「ヨーロッパ合州国」の誕生から新しい世界秩序へ——

第一刷発行 一九九一年四月一五日

第二刷発行 一九九一年四月二〇日

著者 ダニエル・バースタイン

訳者 鈴木主税

発行者 三田順啓

発行所 三田出版会

東京都文京区本郷三丁目二一二 御茶の水センタービル 十一三

電話 (〇三) 三八一八一〇一一

振替 (東京) 九一一五五七七

印刷・製本

図書印刷株式会社

ISBN4-89583-082-9 C0030

© 1991 Printed in Japan

許可なしに転載・複製することを禁じます。

落丁本・乱丁本は送料小社負担にてお取り替えいたします。

オテル・ド・メディシスからオテル・ドゥ・  
カップにいたるヨーロッパの旅でわれわれが共  
有したすべてを祝し、20周年のプレゼントと  
してジュリーに捧げる。われわれはペドゥレガ  
レホスの背後に広がる丘陵地帯に旅の第一歩を  
印したあと、ロンドン、ブリュッセル、ボンで  
の滞在中にデヴィッドが初めて自分の足で歩く  
のを見届けつつ、この旅をしめくくった。

*EUROQUAKE by Daniel Burstein.*

*Copyright (c) 1991 By Burstein & O'Connor, Inc.*

*All rights reserved.*

*The Japanese Translation Rights is arranged with  
Cutis Brown Ltd. in New York Through The Asano  
Agency, Inc. in Tokyo.*

## 日本語版への序文

一人のアメリカ人が書き、いま日本の読者に読んでいただくことになる本書は、ヨーロッパでの出来事に焦点を当てたものである。したがって本書は、新しいグローバルな社会が「トライアド（三大経済圏）」全体に生まれつつあり、新しいグローバルな市場がアイデアと情報の領域に早くもあらわれている状況の、またとない比喩となっているように思われる。

一九八九年二月に私の前著『Y E N!』が日本で出版されたとき、私はすでに、胎動を始めたかに見える新しいヨーロッパを次の本のテーマとすることに決めていた。だが当時、ドイツ再統一はその可能性すらなく、東欧で共産主義体制が崩壊するとは誰も考えておらず、ECの一九九二年計画の重要性は一般にはまだ理解されていなかった。そんなわけで、ヨーロッパに関する本を書くという考えにアメリカの友人や同僚たちの興味をひきつけるのはなかなか大変だった。

自分の考えの正しさを裏づけてくれるきわめて心強いしるしが認められたのは、日本でだった。

『YEN!』への感想を葉書で寄せてくれた日本の多くの読者の中に、ヨーロッパで起こっていることについて書いてほしいと明記する人たちがいたのだ。日本の読者が、まさに私が書くこうとしているものを求めているのを知って、非常に嬉しく思った次第である。ここに実現した本書が読者の期待を裏切らないことを願っている。

しかし、日本の友人の中には、今回の試みにアメリカの友人と同じくらい懐疑的になっている人たちもいた。「あなたはいまや日本の事情に通じた有名な専門家なのだから、今度も日本に関する本を書くべきだ」と彼らは忠告してくれた。

私は自分なりに考えた「禅」のスタイルで答えた。「一見したところ、新作のテーマはヨーロッパです。しかし、もつと深く掘り下げれば、それは日本についての本であり、アメリカについての本であり、またわれわれみんなが直面する共通の未来についての本なのです」と。本書が彼らの手に届きたいまこそ、それが真実であることがわかってもらえらると思う。新しいヨーロッパの興隆が決定的な要因となって冷戦が終結し、新しい世界秩序の創造が求められるようになったのは、まぎれもない事実である。いまや日本の未来図を描こうとするいかなる試みも、新しい秩序がどう展開するかということと密接に結びついているのだ。

私は日本社会の多くの側面にたいして相変わらず批判的だし、新しい世界情勢に適應するうえで日本が問題をかかえていることもよく知っている。だが全体としては、私はまだ日本について非常に「楽観視」している。そして、経済力と金融力と科学技術力を新たに蓄積するとなれば、現代の

日本の文化は世界のあらゆる国をしのぐかなりの利点を有していると信じてつづけてもいる。さらに、アメリカとちがつて、日本はなんとか策を講じて人びとの力を結集し、逆境を有利な条件に転換している。したがって、逆境としか思えない状況と、徹底して「樂觀的な」私の日本観とは決して矛盾しないのである。

日本はまだ「頂上をきわめて」いないし、「奇跡」は終わっていない、日本の太陽はまだ沈みそうにないと、私は強く確信している。今後の数年間に状況はさらに混然として複雑になり、ときには混乱をきわめることもあるだろう。日本は、一九八〇年代の後半に世界の経済力および金融力のシェアをすさまじい勢いで伸ばしたが、そのような成長は二度ととげられないかもしれない。しかし、長い目で見れば、日本——国家としての、国民としての、そして民間企業の集団としての日本——は、正しい決定を下し、それによって太陽は二十一世紀に向けて日本の上に高く昇りつづけると確信する。

重要なのは、日本がひきつづき成功をおさめて繁栄するか否かという問いではない。否定的な意見があちこちで叫ばれているが、そうした問いかけにたいする答は「イエス」にきまりきっているから、ほとんど論議するに足りないとする私は考えている。もっとわかりにくく、はるかに重要だと思われる問いはこうだ。日本は経済力と金融力と技術力を自分のためだけに使うのだろうか？ それとも、日本は世界の真のリーダーとなる方法を見つけ、国内でつちかってきたものを世界の国々のためにも役立てるのだろうか？

日本の読者にはこの問いを真剣に考えていただきたいし、日本が外の世界に大きく貢献しようと



するなら、日本社会のさまざまな面を変える必要があることも真剣に考えていただきたい。

できることなら、本書の出版を実現して下さった日本のみなさんに冒頭でお礼を申し上げたかった。とりわけ、先見の明のある日本の経営者の一人で、本書の日本での出版を引き受けて下さった三田出版の三田順啓社長に感謝している。とかく商売のことしか頭になく、著者の生活や本の内容に頓着しない出版人が多い中で、三田社長が励ましの言葉をかけて協力してくださり、本書の趣旨を理解して下さったことは本当にありがたかった。

編集を担当された三田出版の餌取章男氏にも謝意を表したい。世界情勢が激動したために多くの書き直しが必要になり、原稿の引渡しが遅れてしまったが、餌取氏は何カ月ものあいだ辛抱よく待つて下さった。そして、日本版を成功させるために協力して下さった私のエージェントの浅野清氏にもお礼申し上げる。

言語表現に一家言をもつ日本の友人たちによれば、鈴木主税の翻訳は非常にそつがなく、私の原稿がもともと日本語で書かれていたと思えるほどの出来栄えだという。ある友人はこんなことを言った。「鈴木本の翻訳を読むと、きみがありきたりのライターであるどころか、日本の一流ライターであるように思えてくる」。したがって、ご苦勞をおかけしたことだけでなく、私の評判を高めて下さったことにたいし、鈴木氏にはとりわけ感謝しなければならぬ。

一九九〇年を通じて明らかになった多くの驚くべき新事実を考慮して、私は何度も原稿を書き直した。しかしどんな本でも、ある時点で印刷にまわさなければならず、そうなれば作者には書き直

しができない。脱稿から出版までの時間はかなり短いと思うが、いまの世界は非常に流動的だから、これが読者の手元に届くころには、少なくともいくつかの記述はすでに陳腐なものとなっているはずだ。それゆえ、読者のみなさんには、いつ変化するかわからない特定の事実や傾向にもとづいてではなく、本書の総体的な分析をもとに本書の価値を判断していただきたいと思う。

一九九〇年十二月、コネチカット州ウェスト・レディングにて

ダニエル・バースタイン

原稿を印刷にまわそうとしていた矢先に戦争が始まった。

一九九二年一月十六日（日本時間の一月十七日）の夕刻、この本の最終校に目を通していた私の耳にバグダッド空襲を伝える最初のラジオニュースが飛びこんできた。こうして、本書が印刷されようとしていたまさにそのとき、私はアメリカがイラクとの戦争に突入したことを知った。

この文章を書いているいま、戦争は勃発後まだ七十二時間である。一部の専門家は早期終結を予測し、多くの人びとは開戦の夜の興奮からまださめやらぬ状態である。アメリカではあのDデー以来、科学技術を駆使しての武勇とすぐれた戦略と倫理的な正義と生々しい戦場の士気とが一体となって国威がこれほど高揚したことはなかった。

私自身、開戦の夜には興奮に胸をおどらせたものだが、この戦争がアメリカの勝利で早々に終わることを心から願っている。さらには、その勝利に刺激されたアメリカが、いま戦線で発揮されているくらいの力を傾けようという二大政党の一致した決議と意志のもとに国内問題に取り組むようになるばとも思っている。

だが、私なりに分析してみるに、勝利をつかむことはなかなか容易でないかもしれない。たとえば、現時点ではほとんど想像しえないが、サダムが早々に降伏するという最良の結果を想定してみても、アメリカはやはり非常に複雑な手続きを踏んだり大きな犠牲を払ったりして、世界で最も不安定で暴力的な地域に和平を実現しようとする立場に置かれることになるからだ。また、懸念されるもっと厄介な事態はあとをたたない。

当然のことながら、本書のテーマは湾岸戦争ではない。しかし本書は、大陸のヨーロッパ人と日本人がアメリカ人の大いなる努力に与することをこれほど渋っている理由や、戦争開始直後に円とドイツ・マルクが上がってドルが下落した理由など、この戦争の興味深い側面を理解する手助けとなるものである。また、国内政策という戦場で勇氣ある行動をとるよりも、地球の裏側で大胆な戦争に踏み切るほうがアメリカの指導者たちにとって簡単だった理由も本書に示されている。アメリカはサダムを抑えこむことに成功するかもしれないが、湾岸に氣をとられているあいだに、アメリカのビジネスが平和的な「資本主義の戦い」でさらに多くの市場をライバルに明け渡す結果となるのはありがたくもない皮肉である。

日本に関して言えば湾岸戦争は、日本の政治力と軍事力に現代性が欠如していることや、そのよ

うな力が不在であることを浮き彫りにしているだけに、今後の日本に徹底的な自己分析をうながすものとなっている。外部の世界も日本自体もいまの状況から大げさな結論を導きだし、日本は有力であるどころか無能だと見なすようになってきたが、それは安易というものだ。二つの理由から、その見方は間違っていると私は思う。第一に、本書で述べたように、軍事闘争はいずれ終結し、世界は経済競争という「通常」業務に戻る。そうなれば日本の製品はさらに世代も先を行き、日本の会社は世界一順調な経済と帳簿上の多額の黒字と世界市場に進出するきわめて広範な能力の恩恵に浴するだろう。しかし、日本のリーダーたちは湾岸戦争からしつかりと教訓を得るはずだ。それが第二の理由である。うんざりするほど緩慢で、（とくに外国にたいして）混乱の多い対応ぶりを示しつつ、日本のリーダーたちは湾岸危機を利用して種をまき、日本がいずれ軍隊を派遣して世界中で軍事的な役割——それほど大きな役割ではないにしても——をはたすことができるようにするだろう。日本はまた、部外者にはほとんど気づかれないかもしれないが、少しずつ変化して、世界情勢における決定に政治面で是が非でもかかわろうとするようになるだろう。だからこそ、日本はいま財政的な責務の分担を求められているのだ。つまり、日本の目下の欠点の中には、一人前の超大国になるための要因が長期にわたって生み出されていくということである。

一九九一年一月十九日  
ダニエル・バースタイン



ユーロクエイク——「ヨーロッパ合州国」の誕生から新しい世界秩序へ—— 目次

日本語版への序文 3

コロンブス以後五〇〇年——新しいフロンティアとしての旧世界

ヨーロッパが世界のパワー・バランスを変える 25

一九九〇年八月の砲声 27

資本主義の戦い 34

アメリカ——三極構造ののけ者 38

一九九〇年代のヨーロッパというドラマを展開させる四つのプロット 41

金の動きを追え 45

象徴的な企業提携——IBMとシーメンス、三菱とダイムラー——ベンツ 50

ヨーロッパを目指す日本企業 52

アメリカの急場しのぎの解決策 54

眠られぬ夜を過ごすアメリカのCEO 57

I  
ポスト戦後世界の夜明け

## 1

場面——パリ郊外、ロワヨーマンのもと僧院  
登場人物——新しいヨーロッパ

生存か衰退か？ 65

ドロールの切札——一つのヨーロッパ 72

一九九二年——マジックナンバー 81

「時計の針は十二時五分钟前をさしている」 85

歴史にからんだE.Cの八大事件 87

未来の黄金時代への危険な航海 104

## 2

そして壁は崩壊した

世界への啓示 111

信じがたい勝利 115

「かつてないほど興味深い年」 120



### 3

#### 隠された第三次世界大戦

ビスマルク、ヒトラー、そして『寒い国から帰ってきたスパイ』  
真実と欺瞞のあいだの壁 130  
これまでと違う政治 134  
疑問が解答にとってかわる 141  
「敵は、先が見通せないことだ」 148

126

#### 勝者と敗者

157

役割の逆転と激変の一〇年

159

アメリカにとつてのペレストロイカ

172

曲がり角の一九八五年

176

アメリカ資本主義の戦略的弱点

179

新しい共栄圏

180

情報化時代の戦争

189

レーガンとブレジネフの奇妙な類似

195